

令和7年度 自己評価及び学校関係者評価書

資料3

令和8年(2026年)2月10日
市立札幌開成中等教育学校

1 本年度の重点目標

課題探究的な学習に向き合う環境 / 様々な文化・価値観との出会い、交流できる環境 / 安心して挑戦できる環境

2 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
重点目標	国際バカロレア(IB)が示す10の学習者像を意識した日常的な取組に努め、MYP(Middle Years Programme)およびDP(Diploma Programme)認定校の実現を目指し取り組むことができたか。	A	国際バカロレア機構(IBO)と連携し教育活動を推進している。認定校としての評価と課題について、昨年度に引き続き職員の研修会を3種類に分けて設定し、IBの理解度や課題の段階に対応できるようにした。それによって、教員同士で協働設計の理解と学びが深まり、IB教育の理念や本校の目指す学校作りに対する共通理解を図ることができた。特に開発チームでは各グループが本校で現在検討すべき具体的課題について取り上げ、原因の分析や改善案など業務内容改善に直結する内容について取り組むことが出来た。	A	A
	SSHの取組を通して、教育課程の充実を図ることができたか。	A	SSH指定Ⅲ期4年次目として、第1学年から第6学年までの全生徒が6年間を通して個人研究からグループ研究へと拡げて課題研究を行い生徒の探究力を高めていることや、SSH意識調査及びリテラシー・コンピテンシーの測定では、協働力や統率力の値が高く、生徒たちは、これらのスキルを生かしてあらゆる活動を自主的に企画・運営していることが調査から分かった。また、ATLに基づく探究活動の調査から、個人でPPに取り組むまでの経験が課題設定・課題解決・学際的志向を育むレディネスとなり、次年度のコスモサイエンスに大きく生かされていることも特徴のひとつに挙げられる。	A	A
	重点目標の内容は、学校や生徒の実態を踏まえた適切な設定となっているか。	A	本校では、重点目標で掲げる3つの環境を整えることを重視し、学校の教育理念及びIBの理念・使命を達成することを目指し、IBプログラムとSSH事業において活用している。IBでは多様な文化の理解と尊重の精神を、SSHでは科学的素養の育成と持続可能な世界・地域を創造するカリキュラム、開発を開校以来継続している。そのために、地域の連合町内会やパートナー校、高大、産学の連携を強化し多数の支援者からの協力を得ている。生徒の外部の研修会や発表会への参加意識は高く、今後もこの状況を維持していく。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				
教育課程・学習指導	【課題探究】「なぜ、どうして」を大切にしたい、生徒自身が学びの主人公となる「課題探究的な学習」を充実することができたか。	A	各教科の工夫による課題探究をベースとした指導が一層進められた。IBCの学校開発プラン研修によりユニットプランナーの見直しと提出が行われ、各教科における学習方法や課題設定、概念とのかかわりについて理解が深まった。また、MYPにおける学際的単元(IDU)においては、複数の教科を統合して学ぶ意義を生徒自身が実感しており、自律的にATLスキルの伸長を目指して探究に取り組む姿がアンケートからも明らかになった。	A	A
	【専門性】理数英の専門学科の特色を生かした教育課程を編成することができたか。	A	SSHの学びの集大成であるコスモサイエンスやコスモエッセイの取組について、実験・実証の方法など、必要な知識やスキルを身に付けることのできる教育課程の編成に努めた。また、様々な発表機会において、英語でのプレゼンテーションも行うなど多彩な手法とアイデアでより多くの生徒が参加できる実施方法を整えることができた。教科としても、ネイティブ教員による英語による授業実施のコースを設けるなど、コスモサイエンスの取組につながる段階的な指導を実現することができた。	A	A
	【バランス】知徳体のバランスがとれた教育課程となっているか。	A	「新入生歓迎会」「開成祭」「運動交流祭」など生徒会を中心に生徒が主体的に運営する行事が異学年と交流する良い機会となった。道徳・総合的な学習(探究)の時間、特別活動の横断的カリキュラムである「こことからの時間」を効果的に設定するとともに、自らの健康維持や体力向上に生徒が主体的に取り組む工夫に努めた。道徳は道徳教育推進教諭による全体計画をもとに各学年の担当者を中心に運営が進められ、指導の方法や状況に応じた指導内容の工夫など、きめ細かな対応ができた。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				
生徒指導・教育相談	【育てたい生徒像】生徒がTPOに応じたふさわしい対応ができるように支援することができたか。	B	日常的な気付きや対応を校務PC内にデータ入力・共有する方法により、個々の生徒に関する情報を全教職員で共有し、生徒支援に効果的な取組となっている。今後もこの方法を継続していきたい。また、引き続き、生徒支援に対する共通理解を深められるよう、研修内容の改善を進めて提供していく。改訂した「生活のルール」により、TPOを意識する考え方が浸透してきている。今後生徒自身が発達段階に応じてTPOについて考える取組を提供できるように努めていく。	A	A
	【異年齢交流】学校行事や生徒会活動を通して幅広い異年齢の交流を図り、生徒の自主性や協調性を育むことができたか。	A	学校の方針に基づいて各行事のねらいを明確化し、プロジェクト制(開成祭)、学年をまたいだ縦割りグループ(運動交流祭)による活動を実施できた。特に、運動交流祭における異学年間の交流は、アンケートに回答した80%以上の生徒から肯定的な回答を得られた。これらの取組を踏まえながら、更なる自主的・主体的な活動を目指した環境整備に努めていくとともに、異学年交流が年間を通じて意識できるような取組を目指したい。	A	A
	【教育相談】いじめ防止に関する取組を含め、教育相談の充実を図ることができたか。	B	昨年度まで5年生を対象としていた担任以外の先生と教育相談を実施する「カモンweeks」について、目的をキャリア選択の幅を広げること、教員に相談できる窓口を広げることに整理し、1~4年生に拡大を行った。また、「シャボテンログ」や、いじめアンケート等を適宜有効に活用することが出来た。これらの取組は生徒理解の一助になり得るものとして今後も継続していきたい。放課後に設定される教育相談時間について、教員と生徒がゆとりをもった教育相談活動になるよう取組方法について改善していきたい。	A	A
学校関係者評価委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。校内研修などを通じて教職員同士のTPOに対する考え方がより深まり、共通理解が促されることを期待します。教育相談については、ゆとりのある取組となり充実することを期待します。				

（キャリア教育） 進路探究	【主体的な取組】生徒が自らの生き方を主体的に考え将来を切り拓く力を養うことができるよう、進路探究の充実を図ることができたか。	A	自身の興味関心から将来の姿へのつながりを主体的に考える機会として「自分プレゼン」を実施。また、社会人講話や卒業生講話等を各学年で数多く実施することで、様々な進路やキャリア選択を考える機会を提供し、充実を図った。	A	A
	【自己理解】体験活動を通して自分を知り、自立を目指すことができるような取組ができたか。	A	社会の中で自分らしく生きていくために必要な職業観・勤労観を身に付けることをねらいとして職場体験活動を実施した他、自ら社会とつながり主体的に課題探究活動を推進する「コズモサイエンスプロセス」にも積極的に取り組む生徒が多く見られた。	A	A
	【社会とのつながり】変化の激しい変わりゆく社会で自らどういう役割が果たせるかを生徒自身が意識できるような取組ができたか。	A	「SA(奉仕活動)・CAS(創造・行動・奉仕)」を発達段階に応じて校内から校外へ発展させる中で、校内のニーズ、社会のニーズを探究する体験を積み重ね、社会の中で自分が果たしていく役割を考える経験を、各学年が積極的に行うことができた。	A	A
学校関係者評価 委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				
保健・安全管理	【見守り体制】生徒の安全・安心・快適さを維持する環境を整えることができたか。	A	生徒の見守りは、生徒理解と支援に関する研修を定期的に行い、スクールカウンセラーなど専門的な立場からの助言を参考にしながら、支援の方法を確立する体制を構築した。IBプログラムが推進する日常的な貢献活動を通して、生徒は相互に安全・安心な環境を作り上げる意識を高めている。	A	A
学校関係者評価 委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				
組織運営	全教職員が連携し、分掌業務を円滑に推進できたか。	B	分掌業務と各期業務(基礎期(1・2年)・充実期(3・4年)・発展期(5・6年))の分立体制について、組織体制の在り方は定着してきたものの、全国的にも珍しい体制であるため転入職員への理解・周知の働きかけがより必要である。この体制に至る経緯も含め、3月に職員全体へ振り返りの時間を設け、より効率的かつ合理的なフローの改善ができるかを検討する予定である。	A	A
学校関係者評価 委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。 ・組織運営に関わる考え方には様々な方向性があるため、完全な一致を求めることは非常に難しいと思います。 ・今年度末に行われる振り返りの時間により、さらなる理解が深まることを期待します。				
研修	生徒・保護者・教職員が課題探究的な学習を行うための環境整備を推進することができたか。	A	昨年度より引き続き選択制ICを実施している。今年度の担当は変わったが、各講座のより絞った目的・目標を持って実施できた。昨年度より年間の実施回数が増えているが、あらかじめ内容を計画的に定めることにより効果的な研修を実施できた。併せて、開成開発に所属しているメンバーの動きが昨年度よりも明確になり、活動自体がより活発になってきた。道外研修も年度初めからスムーズに企画できたことで、余った予算を利用して外部講師を招くこともできた。	A	A
	研修等で得たIBプログラムやSSH等の情報を保護者・教職員間で共有することができたか。	A	教員間の情報共有を一層高めることができた。また、アンケートやデータの収集を多く実施し、その結果をもとに業務を進めている。さらに、IB通信を通じて教員と生徒にも必要な情報を伝達できている。IBSからの共有だけではなく、道外研修やSSHの報告会を実施し、教員の学びも共有できている。保護者にはIBカフェなどのイベントやHPなどを通じてポリシーや学校の基本的な情報を共有できているが、ただし、全体を通して保護者とのコミュニケーションにおいてまだ色々成長できるところがある。	A	A
学校関係者評価 委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				
保護者・地域情報提供等の 連携	入学を考えている児童に対し、必要な情報を適宜発信することができたか。	A	今年度の学校説明会は、9月の1回の開催で募集要項を配布し、入学を考えている小学生に対して在校生が模擬授業や校舎案内を担当し、本校生徒の姿を感じてもらう機会とした。また、保護者には教頭の進行による本校教職員によるパネルディスカッションを実施し、より深いIBの理解を促すことができた。	A	A
	学校だよりやホームページ、懇談会などを通して、学校の様子がよく分かるように伝えているか。	A	昨年度より導入された配信システム「すぐー」を活用した各種たより等の配信により、より迅速で細やかな情報発信に努めることができた。また、ホームページで「学校トピックス」の更新を継続することにより、リアルタイムに情報を発信することができ、9割近くの保護者から高い評価を得ている。学校公開日、PT会公開講座等の出欠確認について、昨年度の反省を受けリマインドの連絡をするなど働きかけを行い、細やかな連絡を心がけることが出来た。	A	A
学校関係者評価 委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				
教育環境の整備	タブレット端末や他のICT機器は、課題探究的な学習を行う上で効果的に活用されているか。	A	GIGAスクールでは、市教委貸与端末(1～3年生)及びBYOD端末(4～6年生)を安定して活用できる環境やオンライン上で閲覧できるリソース(百科事典や新聞記事DB)を整備した。セキュリティや利用に関するガイドラインを周知し、生徒は端末を自己管理できるスキルを身に付けている。今後は、新たな課題が出たときに早期対応し、環境整備ならびに運用に反映していく必要がある。様々な場面で利用されるようになり、それに伴うテラシーの指導内容についても検討が進められた。	A	A
学校関係者評価 委員による意見	自己評価、改善策ともに適切です。				